

# Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education  
Faculty of Education, Gunma University

第 1 号

(2013年3月31日発行)

## 目次

- 1 ● 巻頭言：新しいセンターの1年を振り返って
- 2 ● 提言：学校教育臨床総合センターの改組にあたっての期待
- 3 ● 提言：新しいセンターはどんな役割を担ったらよいか
- 4 ● 提言：『群馬大学教育実践研究』の可能性
- 5 ● 寄稿：学び続ける教師像を志向する教員研修リレー講座
- 6 ● 寄稿：50歳を過ぎて学ぶ ―教員研修リレー講座を受けて―
- 7 ● 報告：質の高い活発な教育臨床事例検討会を求めて
- 8 ● 報告：学校の教育力向上を支援するための取組
- 9 ● 報告：大学教員の専門性を学校現場の課題解決につなげるために
- 10 ● 報告：附属小学校における取組 ―提案授業・授業研究会―
- 11 ● 報告：センター協議会・資料室利用状況・フレンドシップ事業
- 12 ● 報告：次年度へ向けた新しい取組の紹介

## ● 巻頭言

### 新しいセンターの1年を振り返って

学校教育臨床総合センター長 黒羽正見

平成24年7月に改組された新しいセンターの一年を振り返ってみますと、限られた予算でセンターの仕事をいっそう活性化し、充実したものにしていくためにスタッフ一同、知恵を絞り、誠実に取り組んだ1年であったような気がします。

本センターでは、教育実践と教育臨床の各部門・センターで学生や教員への教育や研究を行うと同時に、(1) 共同研究の推進、(2) 教育相談の実施、(3) 課題を抱える子どもの総合的研究と研修、(4) 学部新任教員の教育環境整備、(5) 資料室開放、(6) 教員研修リレー講座(公開講座)等の開催、(7) 研究・実践の成果刊行、などの活動や支援を行ってきました。今年度は、新しいセンターの取組の一つとして、「2012現代的学校教育の課題解決シリーズ」と題して、「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業を企画し、群馬県教育委員会並びに上毛新聞社の後援の下に実施することができました。その内容は、本センターを学びのフィールド化として、大学の研究知と学校現場の実践知を交流しながら、お互いの資質能力の向上を図りました。より具体的に言えば、1) 学力向上を図るための学校と教育委員会との連携の在り方について、秋田県と宮崎県の事例を中心に、2) 今求められている「絆」について、東日本大震災3県とイギリス災害事例の比較検討を中心に、など全7講座で行われました。ささやかな取組でしたが、大学教員と現場教師が温かな学習空間の中で共に学び合い、高め合いながら熱心に活動できました。またこの企画は、このリレー講座の主旨に心から賛同してくれた大学教員の組織を越えた無報酬の協力、各学校の教育課題から導いた個々の教師の問題意識である確固たる「われかく思う」という自己認識をもった学び合い、高め合う人間関係を基底にもつ意義のある取組となりました。

本センターは、「教育実践及び教育臨床に関する理論的、実践的な研究と教育を総合的に行い、学部の教育研究の充実に寄与するとともに、他の教育機関及び地域社会と連携を図り、その教育研究活動を支援する」ことを目的としていることから、今後ともこのような活動をいっそう充実させていく必要があります。そのためには、我々自身が教育実践を主体的に振り返り、より魅力的で地域への貢献度の高い企画を提案していくことが大切であると思います。今後とも皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

## 提 言

# 学校教育臨床総合センターの 改組にあたっての期待

教育学部長・教育学研究科長 豊 泉 周 治



昨年7月に改組を行い、いま学校教育臨床総合センターは従来の3部門に加えて、学部・附属学校の連携によって新設された3センターを組み入れ、文字どおり教員養成・教育臨床に関わる総合センターとして活動を開始しています。大学の教育学部が教員養成だけでなく、地域の教育力の向上と教育課題の解決に寄与することが強く求められている今日、臨床総合センターの改組の意義は大きいと考えています。

臨床総合センターの前身となる教育実践研究指導センターが本学部に設置されたのは1981年のことでした。目的は「教育実践に関する理論的、実践的研究を行うとともに実際の指導力を身につけた教員の養成を図ること」と規定され、教育実習の改善など教員養成をより実践的なものとするのが主たる課題でした。いまにして思えば、いじめも不登校もまだ問題化される以前ののどかな時代でした。そして20年後の2001年、諸々の教育問題が深刻化し複雑化するなかで、同センターは現在の臨床総合センターに改組・拡充され、「教育実践に関する臨床の学の創出」を目指し、またその成果を踏まえた教員養成に寄与することを目的として再出発しました。ところが同年のいわゆる「在り方懇」報告以降、教員養成学部・大学院改革が急ピッチで進み、本学部でも埼玉大学との統合問題を経て、教職大学院設置に至る学部・大学院改革が進められました。臨床総合センターの人的資源もそのために割られるかたちとなり、結果として、臨床総合センターによる「教育実践に関する臨床の学の創出」とそれに基づく実践は、今日まで未然の状況が続いてきました。

他方、この間の学部・大学院改革によって、本学部の教員養成はより実践的なものになり、教育の諸課題への取り組みも進みました。群馬県教育委員会との連携体制を整え、喫緊の教育課題についての共同研究や連携事業を実施するとともに、公立学校の協力によって教育実習を充実させ、修士課程の改組・教職大学院の設置へと進みました。さらに2010年からは附属小学校の学級減を機に余裕のできた人的資源を活かして、子ども総合サポートセンター、教員養成FDセンター、学部・附属学校共同研究センターを立ち上げました。子ども総合サポートセンターでは地域の学校が抱える諸課題を総合的に研究し、その成果を基に研修と支援を行っています。教員養成FDセンターでは教員養成に携わる教員の教育・研究指導力の向上を目的として、当面、新任教員を中心に組織的な研修を行っています。学部・附属学校共同研究センターでは教員養成・教育実践に関わる大学教員と附属学校教員の組織的な共同研究の推進を図っています。

1981年の教育実践研究指導センターの設置、2001年の臨床総合センターへの改組において期待された取り組みが、この間の学部・大学院の改革によって、また教育委員会と大学、附属学校との連携によって、順次、実施に移されてきたといつてよいでしょう。ただし、それぞれの取り組みは相互の連絡調整を欠き、学外への情報発信も不十分でした。今回の改組によって、それらの活動が臨床総合センターの下で相互に結び合わされ、同センターはあらためて「教育実践に関する臨床の学の創出」とその成果を踏まえた教育、研修および支援に関わる総合センターとして、再出発したのです。今後、臨床総合センターを地域における教員養成と教育臨床研究・実践の新たな「ハブ」へと発展させ、教育分野における本学のCOC (Center of Community) 機能の格段の強化につなげたいと思います。

## 提 言

# 新しいセンターは どんな役割を担ったらよいか

学校教育臨床総合センター長 黒羽 正 見

平成24年7月より本センターは、現代の新しい教育課題にも応えていくために、これまで学部・附属学校連携推進室内に設置されていた、子ども総合サポートセンター、教員養成FDセンター、学部・附属学校共同研究センターの3センターを傘下に加えて新しいスタートを切りました。これにより、大学教育を支えるだけでなく、地域の教育にも今まで以上に貢献できる、まさに「総合」センターとなりました。

本センターは、教育実践に関する臨床の学の創出を目指して、教育関係諸機関と連携しながら教育実習、教育実践及び教育相談に関する理論的・実践的研究を行い、その研究成果を踏まえて教育および研修を行っております。旧来の3部門（教育実習・実践開発部門、国際理解教育部門、教育臨床心理部門）では、教育実習の改善研究や、授業方法・教育内容の開発研究、ケア・ネットワークづくり等を中心に行っています。また新たに加わった3センターでは課題を抱える子どもの総合的研究やその研修及び支援、教員養成に携わる教員の資質向上を目指した研究会の企画や研修、そして大学と他の教育機関の共同研究を推進しています。この新しいセンターに通底しているのは、大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して、今日の学校教育課題の解決に資する実践的指針を見出すことにあります。

このような基本認識を踏まえた上で、新しいセンターが個性豊かで教育実践力をもった教員の育成をめざすとき、教員養成や現職教員の再教育の中心となり、その核になるのが、この学校教育臨床総合センターであると思います。それを具体的に考えるならば、「児童生徒の心身の悩みに対応できるカウンセリング力をもった教員」「実践的で高い見識にたつ教員」「豊かな教育技術を身につけた教員」などが期待されてきます。そしてその目的達成のために、大学は広く門戸を開け、知を惜しみなく提供し、協力することが大切です。新しいセンターはこうした大学教員と現場教師を結ぶ大きなパイプ役を果たすことが望まれます。地域が大学を大いに利用・活用し、大学教員も地域からたくさんのもので得ていく、そのことの中にこそ、本当の意味での新しいセンターの存在意義があると考えます。

「大学は敷居がどうも高くて」という言葉をよく耳にします。いろいろと聞きたいし、力になって欲しいのだけれど、どうもとっつきが悪いらしいです。誤解を恐れず言わせていただければ、それは大学の教員が、地域から何か言ってくるのを待っているのみで、積極的にこちらから地域に出かけていかず、地域への働きかけが少ないからではないでしょうか。もしこちらから先に温かい言葉をかけるならば、どんなにか地域の人たちが話しやすく、相談しやすくなるにちがいありません。

センターの紀要も他大学では、現場教師のために、実践報告形式で自由に投稿できる領域を設けているところもあります。学校の多くの仲間と各学校でまとめをすることは多いです。しかし、一人でどこの学校に行っても追究できるテーマを持ち研究をする体制にはなっていないのが現実です。教師が自分の実践を冷静にみつめ、そこから何か新しいものを創り上げていくことは、大変ですが大事なことであり、その教師の一生の核になるものです。そして、何よりも実践から学べる「実践学」を構築していく、その間に入り、教師の願いを叶えるべく支援していく、そんなセンターになったらいいなと思う昨今です。

## 提 言

# 『群馬大学教育実践研究』の可能性

紀要編集委員長 中 村 敦 雄

今年度、『群馬大学教育実践研究』の編集を担当して、3つの点に気づきました。

第1に、本誌が大学院生や学生の教育に関して重要な役割を果たしている点です。協働研究等の成果を論文化する作業は、彼らにとって有益な実地訓練の場になっているようです。この点については、すでに実感なきっている先生方も少なくないことでしょう。『自分の論文』を公刊する機会をとらえて、その取り組みの方法を改善していくことは、教育に携わるわたしたちにとって工夫のしどころであります。

第2に、附属学校園の先生方からの投稿をさらにお願ひしたい点です。例年、公開研究会や校内研究会等の機会に、授業に関わった貴重な研究成果が蓄積されていますが、その創見が各学校園の内部的な資料にとどまっているのは、実に惜しいと考えます。学校現場に経験の浅い教師（わたしたちが育てた人たちも含めて）が増えてきている現状からすれば、有効な手がかりを提供することにつながり、社会的な貢献を果たすことにもなるからです。もしかしたら、交流が起こって、互恵的な効果も期待できるかもしれません。もちろん、これまでもご寄稿くださった先生方も少なからずいらっしゃいますが、さらに多くの先生方が、それぞれの貴重な成果を『群馬大学教育実践研究』に発表してくだされば幸甚です。

第3に、デジタル化によるメリットを活かす必要性がある点です。本誌の出発は紙媒体でしたが、数年前にデジタル化されてCD-Rで刊行されています。インターネット上でも公開されていることから、ダウンロードが自在で、いつでも誰でもが読めるといった新たな利点が生じました。ただし、その本質的なあり方は、紙の代替物としての位置にとどまっています。しかし一方で、昨今のデジタル革命を目の当たりにしている身としては、新たなあり方を構想することも忘れてはならないと考えます。研究成果や作品を取り上げる場合に、録音や録画（静止画・動画）、データ等も含めたマルチモーダルな方法で発表するのがふさわしい分野もあるのではないのでしょうか。何よりも、教職大学院・教育学研究科・教育学部に所属するわたしたちのアイデンティティにも関わる授業の研究では、そこに録画があれば、学習指導の実相をとらえるうえでの有益な手がかりになります。

この点に対しては、研究業績の評価方法が紙媒体の論文を基準としているかぎりマルチモーダルは時期尚早だといった反論や、制作コストは大丈夫なのかといった現実的な忠告も返ってきそうです。そうした検討は、今後の宿題となりましょうか。

もうじき最新号が先生方のお手元に届くことと思います。毎年恒例の見慣れたもののひとつとして受けとめられがちな『群馬大学教育実践研究』ですが、以上の点からとらえ直してみると、メディアとしての可能性をさらに広げていく余地が残されていることが分かります。

わたしたちにとってのぞましい器にするためには、さらに何が求められているのでしょうか？ とともに知恵をしばる必要があります。

## ● 寄稿

## 学び続ける教師像を志向する 教員研修リレー講座

理科教育講座 益田 裕 充

群馬大学学校教育臨床総合センターが主催する「教員研修リレー講座 2012」が、小・中・高・特別支援学校の先生方に参加して頂き平成24年5月から7月にかけて全7回、群馬大学で開催されました。私の専門は授業デザイン論です。私自身は、この講座で「授業中の言語活動をどう評価するか」ということが、今日の学校教育で展開される授業の課題であると考え、先生方にその評価の方法について講義させていただきました。例えば、学校の授業研究会で先生方は「今日の授業は活発なやりとりがあった」などと授業を評価し合います。そこに発話の量に対する感想はありますが、質的な検討はありません。そこで、いかに対話の質を評価し、教師の指導にフィードバックすればよいか話題提供させていただいたのです。

大学教員が学校教育の現代的な課題を最新の研究成果に基づき講義するこの講座は、いわば理論と実践の融合を志向した学び合いの場です。例えば、私の授業デザイン研究を例に取りあげてみましょう。群馬県教育委員会では「はばたく群馬の指導プラン」を示し、指導方針を明確に打ち出しています。その理科の頁を参照すると、「問題解決の過程」を重視することが述べられています。このことを「デザイン実験アプローチ」という学習科学の理論から考察します。デザイン実験とは、「メカニズムの理論的構想に端を発し、仮説的なメカニズムを盛り込んだデザイン、実験、教育ツール(カリキュラム、教授法、ソフトウェア)の体系的な研究を通して、その検証を行う分析的アプローチ」です。分かりやすく言えば、指導方法を実験的に提案し、そこからどのような力が子どもに育成されるのかを実証し、さらなる指導法の改善を試みようとする研究です。これまで授業デザイン研究は、授業中の「子どもの学び」に検証の力点が置かれることが多かった。「教師の指導」と「子どもの学び」の関係は、「発問」とその「発話」レベルに止まることが多かった。ところがデザイン実験は、授業のマクロな方略(いわば指導過程)を実験的にデザイン(設計)し、そこから、子どもの学びを解明しようとする、これまでにない教育工学のアプローチです。そこで、前述の「問題解決の過程」の重視という視点は、デザイン実験アプローチという理論で実証できます。例えば、「問題解決の各過程を有機的に関連づけることが子どもの思考力を育成する」という仮説を立てます。そこで、課題と考察の関係を「問い」と「答え」の関係にした授業を実験的にデザインします。これを「デザイン原則」と呼びます。このデザイン原則のもとで、子どもに現れる科学的な概念を実証します。その結果、例えば、何を考察させたいのかをはじめにデザインすることがデザイン原則として重要であることが示唆され、その原則に改善が加えられるかもしれません。これは、大学の知と学校の知の融合なくしては創造し得ない教育の創造です。

今から25年前のことです。私が初任者研修に初任者として参加したとき、研修から学校に戻ると校長先生はこう言いました。「研修に参加して何を学んだ」と。今、初任者研修に対して、こんな評価をする校長先生は存在しません。それほどまでにOJTは教育界に浸透していました。この頃と比べ、職員室の相互教育力は著しく変容しています。一方で大学の機能も変容しています。教員研修リレー講座は、学び続ける教師像を確立するためのいわばデザイン実験としてこれからも続くはずで

変容する社会の中で、アチーブメントではなくリテラシー、コンピテンシーといった能力としての学力育成を先進諸国が追究する時代にあって、教壇に立つ教師には、自ら学び続け自己の能力を更新させる責務を負う時代が到来していると言えます。

## 寄稿

# 50歳を過ぎて学ぶ — 教員研修リレー講座を受けて —

前橋市立時沢小学校 教諭 堀澤直樹

### 1 参加の動機

教員研修リレー講座には、都合で参加できなかった回を除き、5回に参加しました。大学時代は、講義に出るのが嫌いだったのだが、教員として働く中で、専門的に研究している人の話を聴くことの重要性に気付いたからです。

今までは、自腹を切って東京あたりまで出かけて行って聴くような話を、地元で聴けるのですから、参加しない手はないです。設定されていたテーマも、今日的な教育課題に関することが多く、土曜日の午後を費やしても聴く価値があると感じられました。

学生時代には理解できなかったであろうことが、仕事の経験を積むことでストンと落ちます。そう思うようになったのは、10年目を過ぎたあたりからです。50歳を過ぎても、まだまだ勉強し足りないことがあります。

### 2 感想など

リレー講座は、講師がリレー形式で替わっていきます。幸か不幸か、今回は参加者が少なく、研究室のゼミのような雰囲気です。和気藹々と話を聴くことができました。100人以上入れるような大教室では、講師とのやりとりは不可能です。疑問をそのままにせず、講義を無駄なく理解することができたのは良かったと思います。

ただ、参加者が少ないことは、せっかく遠方から来てくださっている講師の方に申し訳ないような気持ちになりました。もう少し人を集めるには、県や市町村の教育研究会や校長会、教頭会などとも連携していく必要があるのではないかと思います。

また、今までは自分の興味のある話を選択して聞くことが多かったですが、リレー講座では講師と共にテーマも変わっていくので、幅広い知見を手に入れることができました。

「教育委員会との連携」に関する講座では、教諭という立場ではあまり意識することのない教育委員会制度についてのお話を聞くことができました。普段の仕事では、子どもたちの方を見るばかりで、行政的なことにはあまり目を向けていなかったのです。しかし、先進的な取り組み例を聞く中で、教育委員会の重要性を再認識することができました。

「言語活動」についての講座では、理科教育中心に、学習指導要領で重視されている言語活動についての話を聞けるということで、現場の教員の参加が多くなりました。学習指導要領が改訂された経緯を理解し、学習指導について再考できる内容でした。

「学校組織」に関する講座では、タイトルから管理職対象の話であると思いましたが、中堅教員として考えながら聞いていました。組織の一員として学校経営に関わることの大切さを確認するとともに、コミュニティスクールに関する知見を得ることができました。

「発達障害」に関する話は学校でも研修を受ける機会が多く、多少の予備知識をもって講座に臨みました。ディスクリシアの話など、講師とやり取りしながら聞くことで、今まで何となく分かったような気がしていたことを、きちんと理解することができました。

「男女共同参画」に関する講座は、一番批判的な気持ちをもって参加しました。男女の性差による区別は必要だと考えていたからです。話を聞きながら、性差を理解した上で、双方が尊重し合うことの大切さを理解し、批判的な考えがなくなっていました。

地元でこのような興味深い講座が開かれていることは、大きな財産だと思います。次回も開催されるなら、是非知り合いを誘って参加したいと考えています。

## ● 報 告

# 質の高い活発な教育臨床事例 検討会を求めて

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

教育臨床心理部門では、県内のスクールカウンセラー等の心理職、学校教育相談に携わる教員を対象とした、「教育臨床事例検討会（以下事例検討会）」を実施しております。ここでは、参加メンバー各自が直面している事例への対応や課題に対する意見交換を行うとともに、当センタースタッフ（教育臨床心理部門担当および客員教授）がスーパーバイザーとして加わり、地域の教育現場と当センターが連携し、学校や児童生徒、教員などへの有機的なサポートの提供をすることを目的としています。

当センタースタッフがファシリテーターとなり事例検討会を進行していますが、基本的には事例提供者が事例の発表を行い、その後に討議を行っています。毎回積極的な発言や意見が寄せられ、予定時間を超過することも少なくありません。また、勤務終了後の遅い時間にもかかわらず、熱心に参加するメンバーもあり、教育相談活動に対するモチベーションの高さを感じさせるものとなっています。今年度は8回の事例検討会を実施できました。各回の事例の概要および事例提供者、参加者などの主な内容を以下に紹介します。

### ■各回の教育臨床事例検討会の主な内容

回	実施日	時間	事業提供者	事例	参加者
1	2012年 5月16日(火)	19:00~21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	不登校の中学生兄妹への支援について	9名
2	2012年 6月12日(火)	19:00~21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	母親から離れられない中1女子の不登校生徒の事例	8名
3	2012年 7月17日(火)	19:00~21:00	県内公立中学校生徒指導嘱託員	中3男子場面かん黙の生とに対する援助・支援	5名
4	2012年 9月18日(火)	19:00~21:00	県内公立小学校教員	情緒が不安定で学級になじめない男児への援助支援 ～面談やチャンス相談を利用して～①	6名
5	2012年10月16日(火)	19:00~21:00	県内公立小学校教員	情緒が不安定で学級になじめない男児への援助支援 ～面談やチャンス相談を利用して～②	8名
6	2012年11月20日(火)	19:00~21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	発達障害を抱える男子児童への援助事例	7名
7	2012年 2月12日(火)	19:30~21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	自己肯定感の低下に問題を起因する女子生徒への援助事例	7名
8	2012年 3月(予定)	検討中	県内公立学校スクールカウンセラー	検討中	-

また、事例発表、事例検討（ディスカッション）は以下のように行われています。



今後の展望としては、積極的かつ定期的に参加するメンバーもいらっしゃることから、地域の教育現場への援助サービスを向上させるため、引き続き事例検討会の機会を提供していきたいと考えております。現在活用しているポスターやチラシ、メーリングリストでのインフォメーションを活用し、より多くの教員やスクールカウンセラーに呼びかけ、参加メンバーを増やしていく面も課題となります。しかし、取り扱う事例が個人情報も含まれる非常にデリケートなものであること、ある程度の人数であるからこそ積極的な意見交換が可能であることなども含め、この点に関しては慎重に審議していく予定です。より質の高い活発な事例検討会が実施できるよう、来年度も尽力していきます。

## ● 報 告

# 学校の教育力向上を支援するための取組

子ども総合サポートセンター員 **瀧澤 泰之**

本センターの特徴は、「訪問相談」、「研修支援」、「個別・集団指導」、「乳幼児の養育相談」の4つの事業から地域支援を展開していることです。今回は、研修支援につきまして、報告させていただきます。

### ◆ 研修支援

県内の教育関係者を対象に、公開研修会の開催や、研修講師の派遣、検査器具の貸出等を行い、研修の機会を提供しています。

#### ア 公開研修会の開催

平成24年度は、表1にあるような全6回の公開研修会を開催し、小学校、中学校、特別支援学校、関係機関等から、のべ246名の方々が参加されました。

■表1 公開研修会開催一覧（H24）

月 日	テ ー マ	講 師	参加者数
8月5日 ～6日	個別の指導計画、個別の教育支援計画の立案	懸川武史先生（センター長） 霜田浩信先生（教育学部障害児教育講座准教授） 岡田恭典先生（医学部附属病院小児科講師） 岩瀧大樹先生（教育学部附属学校教育臨床総合センター講師） 林 正先生（副センター長）	7名
1月21日	個別の指導計画の実施と評価	霜田浩信先生（教育学部障害児教育講座准教授） 岡田恭典先生（医学部附属病院小児科講師）	27名
8月2日	ピア・サポートの理解とトレーニングプログラムの作成	懸川武史先生（センター長）	44名
1月21日	学校における発達障害児への支援 －医療の視点からの子どものとらえ－	岡田恭典先生（医学部附属病院小児科講師）	99名
10月29日	心のケア －被災児童生徒を含めた集団へのアプローチ－	森川澄男先生（日本ピア・サポート学会会長） 菱田準子先生（日本ピア・サポート学会研究委員会委員長）	33名
11月11日	発達障害のある子どもへの指導・支援の検討	霜田浩信先生（教育学部障害児教育講座准教授）	36名

#### イ 研修講師の派遣

平成24年度は、下表のとおり、教育団体や学校からの依頼に応じて、2ケース4回の研修会へ、附属特別支援学校スタッフを講師として派遣しました。

月 日	研 修	講 義 テ ー マ
8月24日	A市幼・小・中連絡協議会 研修会	発達障害の特性と指導上の留意点
10月13日	附属小学校 校内研修	発達障害児を持つ保護者の気持ちとその対応
10月27日	附属小学校 校内研修	発達障害児への指導・支援 －個別・集団指導の実践から－
12月1日	附属小学校 校内研修	特別支援学校における授業づくり

#### ウ 検査器具の貸出

平成24年度は、B市教育研究所の依頼を受け、実技研修会を実施するためのWISC-IIIとK-ABCの検査器具を貸し出し、ご活用いただきました。

## ● 報 告

# 大学教員の専門性を学校現場の 課題解決につなげるために

教員養成 FD センター長 日 置 英 彰

全国の教員養成学部が抱える問題点として、「教員の研究領域の専門性に偏した授業が多く、学校現場が抱える課題に十分に対応していない」ことが指摘されています。この背景には、教育学部には初等・中等教育にあまり関与した経験のない教員が多いことが挙げられます。教員養成とのかかわりを考えてどのように自分の専門の授業を展開していくか、また、自らの深い専門性を学校現場の抱える課題解決にいかに応用していくかを考えることが、教員養成学部の教員に求められる喫緊の課題となっています。今年度、本センターではこの課題を解決するために、以下のような研修の機会を提供しました。

### 1 新任教員研修会

本学の歴史、組織、特色だけでなく、全国の教員養成学部が抱える問題点、審議会の答申、今日の教育課題等の情報提供を行いました。

### 2 附属学校や教育実習提携校の授業参観、授業研究会の参加、附属学校教員との懇談

附属学校の公開研究会、各種授業研究会、教育実習中における学生に対する現場教員の授業の参観などに積極的に参加してもらうよう、情報を提供しました。本センターでは、その機会に現場教員との懇談の機会を設けるなどして、新任教員と附属学校教員との連携のサポートを行いました。

### 3 教育サロンの開催

学校現場が抱える課題に対して自身の専門性をどのように生かすか考えるためには、教員の個々の専門性を超えて教育と研究について自由に語り合うことが重要です。そのような機会として、年2回の教育サロンを開催しました。

### 4 先進的な教育実践校の視察

本年度は、先進的学校建築（教科教室運営方式型）を生かした自主的な学びの協同学習を推進している茨城県日立市立駒王中学校の見学会を開催しました。

### 5 附属学校教員に対する研修会

本センターの活動を実りの多いものにするためには、附属学校教員の理解と協力が不可欠です。そこで、附属学校4校園の教員に対して、FDセンターの取り組みや教員養成に関する諸課題に関する情報提供を行いました。



教育サロン



日立市立駒王中学校の見学

## ● 報 告

## 附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長 江 森 英 世

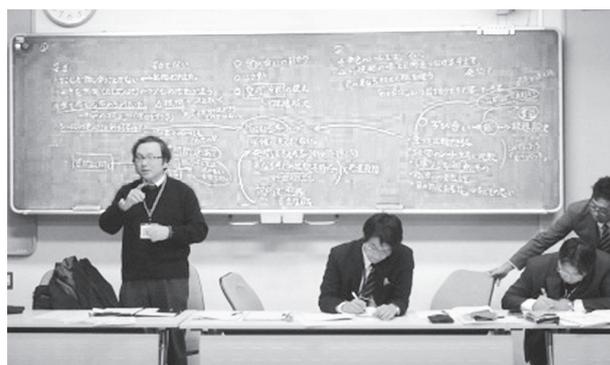
附属小学校では、毎年10月下旬から2月上旬にかけて、提案授業と授業研究会を実施しています。平成24年度は、以下の表に示したとおり、11の教科等部の研究の方向にそった提案授業を公開し、各教科等部の研究の内容の妥当性や有効性について、その授業をもとに討議を行いました。この提案授業と授業研究会は、研究の具体化及び一人ひとりの教員の授業力の向上に資することを目的としています。学部・附属学校共同研究センターは、以下に示す教育学部・大学院教員を派遣し、附属小学校における授業研究を支援することを通して、群馬県内の公立学校における授業改善への方略を模索しています。

### 〈提案授業・授業研究会 学部・大学院教員指導者〉

職 位	指 導 教 員	日 時	備 考
教育学部 教授	益田 裕充 先生	平成24年11月 1日(木)	理科研究
教育学部 教授	中村 敦雄 先生	平成24年11月 5日(月)	国語科研究
教育学部 教授 講師	松本 富子 先生 鬼澤 陽子 先生	平成24年11月 7日(水)	体育科研究
教育学部 教授 講師	岩永 健司 先生 宮崎 沙織 先生	平成24年11月12日(月)	社会科研究
教育学部 教授	懸川 武史 先生	平成24年11月20日(火)	生活・総合研究
教育学部 教授 准教授	吉田 秀文 先生 菅生 千穂 先生	平成24年12月13日(木)	音楽科研究
教育学部 教授 准教授	茂木 一司 先生 郡司 明子 先生	平成25年 1月16日(水)	図画工作科研究
教育学部准教授 准教授	小林 陽子 先生 前田亜紀子 先生	平成25年 1月22日(火)	家庭科研究
大学院教育学教授 准教授	山崎 雄介 先生 音山 若穂 先生	平成25年 1月25日(金)	道徳研究
教育学部 教授	西谷 泉 先生	平成25年 1月28日(月)	算数科研究
教育学部 教授	上原 景子 先生	平成25年 1月30日(水)	英語活動研究

○提案授業は5校時（45分間）、授業研究会は、研究授業を実施した日の16：30から行います。授業研究会は120分間とし、その内容は以下の通りです。

- ・研究の方向及び授業説明……………20分間
- ・質 疑……………20分間
- ・討 議……………65分間
- ・指導講評……………15分間



生活・総合授業研究会の様子

## ● 報 告

# センター協議会・資料室利用状況・フレッドシップ事業

教育実習・実践開発部門 黒羽 正 見

### ■第82回国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加

「国立大学教育実践研究関連センター協議会」とは、全国の教育実践総合センターや関連するセンターで構成されている協議会で、年2回、総会等が行われています。本センターからは、平成25年2月19日に東京学芸大学で開催された第82回国立大学教育実践研究関連センター協議会に黒羽センター長が参加してきました。午前中は、各部門（教育臨床部門、教育実践・教師教育部門、教育工学・情報教育部門）の活動状況や計画に関する報告があり、不登校や特別支援教育、教員養成カリキュラムや教職大学院、ICT関連も事柄などが話題にあがりました。お昼過ぎから、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（平成24年8月28日中央教育審議会答申）」に関して、文部科学省の担当官による講演があり、答申の概要や個々の詳細な内容について解説がありました。最後に、上記3部門にわかれての部門会議が行われました。附属学校園とのかかわり、相談活動や地域学校支援、免許更新制や教職大学院とのかかわり、情報化に対応できる資質能力等について、各大学の取組や動向について情報交換・意見交換を行ってきました。

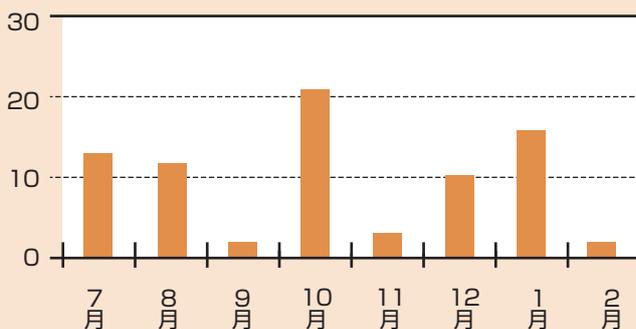
### ■センター資料室の利用状況

本センターの資料室は、学生や教職員の皆様に利用が可能です。とくに全国の教育実践センター紀要や群馬県内の小・中学校で使用されている教科書、教師用指導書、学習指導書編、附属DVD-ROM、附属CD-ROM

等があります。教育実習準備、卒業・修士論文や教育実践報告の参考文献をはじめ、さまざまな教育実践や研究活動にご活用下さい。

また、所蔵しているセンター紀要は、次年度から当センターのホームページからも検索可能です。今年の教科書教材やセンター紀要論文の利用状況の詳細は、左グラフの通りです。教育実習のための教科書類は充実しているので、来年は多くの学生に活用して欲しいと思います。

月別資料室貸出状況



### ■フレッドシップ事業

平成24年9月22日から23日の1泊2日で、体験的科目フレッドシップ事業「ネイチャー・カウンセリング」が国立赤城青少年交流の家と連携して行われました。1泊2日の赤城山の合宿では、講義やエクササイズなどの実際の活動を通じ、障害について、教育について、他者と関わるることについて、多面的に学習することができました。実際の学校教育現場を想定した活動の中で、さまざまな個性をもつ子どもたちへの関わり方の考えを深めることができました。子どもたちと一緒に行うゲームを考える際は、グループのメンバーと知恵を出し合い、何かを創り出すことの難しさと楽しさを体験できたようでした。今回は、人間関係を個人や集団の基本的な性質を踏まえながら、対人スキルやコミュニケーションスキルを体験的に学び、他者との関係づくりに加えて、新たな自分自身と出会えたよい機会となりました。

## 報 告

# 次年度へ向けた新しい取組の紹介

教育実習・実践開発部門 **黒羽正見**

■平成25年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2013」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が、下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については、各学校へ案内ポスターを配布し、当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

## 2013 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

### 学び合う仲間による教員研修リレー講座

講座日	担当/所属/専門分野	内 容
第1回講座 5月18日	13:30~15:00 (山梨県立大学) 堀井啓幸 教授/学校経営学	コミュニティスクールの現状と課題 —学校と家庭・地域の編み直し—
第2回講座 5月25日	13:30~15:00 (東京学芸大学) 佐々木幸寿 教授/教育行政学	学校の危機管理 —先生のための法律—
第3回講座 6月8日	13:30~15:00 (富山大学) 松本謙一 教授/生活・総合学習	生活科・総合的な学習充実のための 課題と方法
第4回講座 6月15日	13:30~15:00 (群馬大学) 益田裕充 教授/授業づくり論	授業研究の視点と方法
第5回講座 6月22日	13:30~15:00 (上越教育大学大学院) 稲垣応顕 准教授/カウンセリング	キャリア支援に活かす教育カウンセリング
第6回講座 6月29日	13:30~15:00 (群馬大学) 霜田浩信 准教授/障害児心理学	発達障害の理解と支援
第7回講座 7月6日	13:30~15:00 (群馬大学) 黒羽正見 教授/教師教育	学級力を高めるための方法と課題 —学級組織文化の構築—

■新しくなった学校教育臨床総合センターでは、大学の研究知と学校現場の実践知を交流しながら、お互いの資質能力の向上をめざした次のような事業を企画しています。

#### ○ 授業カンファレンス研究会

授業カンファレンスは、教師自身のパーソナリティを柔軟で豊かにするための方法の一つです。自身の授業行為の具体的事例を通して対話しながら、自己を冷静に認識・理解するための「自己洞察」や「自己省察」の営みを促進します。この研究会の名前の由来は、教師の使命として、「教える」こと以上に、普段の授業実践事例を協同で検討しながら、参加者一人ひとりが「学習者として絶えず成長し続けること」を重視しようという考えから来ています。

#### ○ 教育研修員・研究協力員の募集

学校教育臨床総合センターを利用して、実践的な研究を推進するための教育研修員・研究協力員を募集します。教育研修員は平成25年度4月より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育実践に際して、学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。また研究協力員は、平成25年度より年1回(4月)の募集となります。

授業カンファレンス研究会への参加および教育研修員・研究協力員の応募方法の詳細については、当センターのホームページをご覧ください。

### 群馬大学教育学部 学校教育臨床総合センターニュース第1号

発行日：平成25(2013)年3月

発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地 TEL027-220-7385 FAX 027-220-7381

URL <http://www.edu.gunma-u.ac.jp/r-center/>